

2025

5

ナイル

現代短歌ナイル

ナイルキャンパス／五代目神田伯梅

芙貴子ワールド／松本芙貴子
偶然の糸を遊ぶ【11】

3月号作品批評／宮本史一（心の花）

涼さんのにぎわいホビ～／橋本涼

高校生短歌特集【8】



NILE CAMPUS

311

伯梅閑話 — 千代大明神 —

小村井敏子（五代目神田伯梅）

六代目神田伯龍の大切な妻だった、千代夫人が敏子の夢枕に立った。それで、第二歌集の五十七頁にこの歌を載せた。

・南無千代大明神願わくばよろしきようにまもらせたまえ

千代夫人が守ってくださると思ったが、本当にそうだと思えることが多々あった。その第一は現在の住居だ。結婚当初、敏子は、東京都大田区の大森駅から鎌倉市の大船駅へ通勤していた。大船駅前の駐車場に車をおいて、そこから、職場に向かっていた。夜遅い仕事のある伯龍と朝早い敏子。時間的に大変だった。そんなとき、鎌倉の仕事先のお寺の住職から鎌倉の家を借りてくれないかと伯龍が言われた。ハワイから帰国する両親のために購入したが、息子との同居を選んだので、人に貸していた家だ。行ってみると山を切り開いた住宅地で、その下の方の小高いがそれほど高くない場所だった。入口に段差がなく、玄関先に車を入れられた。ちょうど、駐車場の法律が変わって、広くなくても車が入ればよいことになったときだった。千代夫人が亡くなったとき、伯龍は仕事先の寺に墓を建てた。そのお墓に歩いて行ける場所だった。千代夫人が呼び寄せたとは思えなかった。最初の住人が花好きだったようで、かいどう、沈丁花、こぶしなどがあつた。たくさんの花木を狭いところに植えてあつたので、次々に枯れた。満天星つつじは車を入れるために敏子の職場に移植した。残ったのは、椿とぼけ。百日紅にぎくろなど。転居したのは、ちょうど、六月で五本の椿は毒蛾の幼虫に荒らされていた。手入れしないとそうなるのだ。この年は手が付けられなくなっていたので、翌年から、気を付けて見つけるようにした。伯龍が家を借りてもどこからも補助が出ない。敏子が借り、売ると言われたとき、敏子を買った。夫に食べさせてもらって、家を買ったことになる。